



Title	樋口一葉『軒もる月』論：「十二通の文」との対峙
Author(s)	金, 侖姫
Citation	阪大近代文学研究. 2012, 10, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92677
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

樋口一葉『軒もる月』論

——「十二通の文」との対峙——

金 侖 姫

一 問題の所在

『軒もる月』（『毎日新聞』明28・4・3、5）は従来、「夫と恋人との間で煩悶する人妻」⁽¹⁾がその「恋の煩惱から抜け出」⁽²⁾し、「多少の紆余曲折はあったにせよ、屈することなく「我執着」を断ち切つてみせた」⁽³⁾物語という一定の解釈が施されているように思われる。

しかしその一方で、次の引用に示した末尾の場面での三度繰り返される女（以下、袖とする）の「高笑い」を巡つては様々な議論がなされており、「女の心の揺らぎとその克服という一義的な読みの方向を攪乱させ」⁽⁴⁾するものとして問題にされてきた。

来し方往く末おもひ忘れて夢路をたどるやう成しが、何物ぞ俄にその空虚なる胸にひびきたると覺しく、女子はあたりを見廻して高く笑ひぬ、其身の影を顧り見て高く笑ひぬ、殿、我良人、我子、これや何者として高く笑ひぬ、

目の前に散乱れたる文をあげて、やよ殿、今ぞ別れまいらするなりとて、目元に宿れる露もなく、思ひ切りたる決心の色もなく、微笑の面に手もふるへで、一通二通八九通、残りなく寸断に為し終りて、熾んにもえ立つ炭火の中へ打込みつ打込みつ、からは灰にあとも止めず煙りは空に棚引き消ゆるを、うれしや我執着も残らざりけるよと打眺むれば、月やもりくる軒ばに風のおと清し。

特に笹淵の「殿のみならず、良人、我子に対する執着までも止揚した女の最後の心境は唐突で理解困難」⁽⁵⁾とする指摘のように、「殿」だけではなく「良人、我子」まで言及されていることへの説明は、本作品を読み解くための不可欠な要素となつていると言えよう。

これまでの先行研究では袖の「高笑い」を、現実を見据えてしまった「虚無」⁽⁶⁾か「悟道」⁽⁷⁾と捉える解釈と、恋から逃れた喜びとみる解釈とに分かれている。喜びとみる解釈の根拠となるのは作品の最後の一節、「月やもりくる軒ばに

風のおと清し」であり、この一節が袖の心象の暗喩と見なされ「自分を縛つてきた恐れから解放された喜びの笑い」(8)として捉えられている。

本稿は現実を見据えた後の一種の「悟道」と見る見解にほぼ倣うものではあるが、ここでは三度続く〈高笑い〉の対象が、「殿、我良人、我子」だけではなく、物理的な空間である自分の身の「あたり」とそこに映された「身の影」も含んでいることに注目したい。

なぜなら、袖は「殿」「良人、我子」に対する執着」だけではなく、現在の自分の境遇とそこで生活を営んできた自身自身のことまで「止揚」していると考えられるからである。結末における「十二通の文」の焼却は、袖自身の「來し方」から「今」までの生活への「執着」をも切り捨てることとして捉えられるのではないだろうか。

そこで論者は自分の情念との対峙を通じて「今」の現実と向き合った袖が「往く末」へと新しい一步を踏み出す瞬間として「十二通の文」の焼却場面を捉えたい。

二 「九時」という時間設定と「不貞」の内実

我が良人は今宵も帰りのおそくおはしますよ、我が子は早く睡りしに帰らせ給はゞ興なくや思さん、大路の霜に月氷りて踏む足いかに冷たからん、炬燵の火もいとよし、酒もあたゝめんばかりなるを

袖の心中描写によつて開始される冒頭は、赤ん坊を寝かし、良人を迎える支度が終わつた「今宵」の時点に焦点が当てられている。注目したいのはその「今宵」の時点が、「九時」という時間に特定されていることである。

時は今何時にか、あれ、空に聞ゆるは上野の鐘ならん、二ツ三ツ四ツ、八時か、否、九時に成けり、さても遅くおはします事かな、いつも九時のかねは膳の上にて聞き給ふを、それよ今宵よりは一時づゝの仕事を延ばして此子が為の収入を多くせんと仰せられし成りき、火氣の満たる室にて頸やいたからん、振あぐる鍵に手首や痛からん。

袖にとつて「九時」は「いつも」ならば良人の膳の世話をしていた時刻であり、良人にとつても仕事から帰り、夕食を取っているはずの時刻である。しかし「今宵」の「九時」は、平素より遅くなつた良人の帰宅を待つ時刻として設定されている。また「さても遅くおはします事かな」とあることから袖自身の予想以上に良人の帰宅が遅くなっていることが見て取れる。

そしてその時刻が「上野の鐘」という「時の鐘」によつて告げられていることに注意しておきたい。

「上野の鐘」とは現在の台東区内にある上野寛永寺の「時の鐘」のことを指す。浦井(9)によると「時の鐘」は、「江戸」という都市における時刻報知の中心的手段であり、明治に

入り時刻改正が行われても、時計などの普及によって人びとが時の鐘以外の手段で時刻を知ることができるようになるまで、その中心的役割を担っていた」のである。

なお内田⁽¹⁰⁾の、明治二十年代においてクロックの保有率が八・〇%、ウォッチの場合は〇・八%で、三十年代にはそれぞれ三一・五%、四・二%であったとする資料を参照すれば、本作品が書かれた明治二十八年当時にも、時計は庶民の手には届かない高級なものであったと考えられる。

例えば一葉の他の作品の中で、『たけくらべ』（『文学界』明28・1）明29・1）では、高利貸の田中屋の一人息子正太郎が誇らしく語る自分の将来像の中に「祖母さんが仕舞っておく金時計を貰って」（十一）とあり、「金時計」が正太郎の憧れの対象として描かれている。また『軒もる月』の一年後に発表される『われから』（『文芸倶楽部』明29・5）では、良人の帰宅を待っているという『軒もる月』の冒頭と似通った場面設定から始まっているが、寝間の時計の十二を打つまで（一一）と時刻が「鐘」の音ではなく「時計」によって表現されており、金に不自由しない金村家という設定が効果的に生かされていると考えられる。

『軒もる月』で袖の家は、貧しい職工の家として設定されており、「上野の鐘」の音により時間が提示されることは「破れ窓の障子」「畳の破れ」「すゝけたる天井」という形容と相まって袖の家の経済状況を物語っていると言えよう。些

細な小道具ではあるが、一葉は意識して取り入れていると考えられる。

なお本作品の「未定稿B・II」を参照すれば、「小石川の白山下に木浦松五郎といへるほう兵工廠の職工」（11）とあり、制作段階においては地名と良人の名前、職業が具体的に設定されていたことが分かる。

江波戸の「明治三十三年の「東京府職業調査」（12）によれば、明治三十三年当時人力車挽は浅草を中心にその近隣の本所・下谷、さらに深川・神田へと大集団を形成しており、これに対して労働者は、「芝を筆頭に小石川がこれにつき、いずれも男子労働者が主体となっておりところからみて、機械器具、砲兵工廠といった工場との結びつきが強い性格のもの」であった。

これを参照すれば、未定稿の段階で「小石川の白山下」という場所の設定に、「ほう兵工廠」で働く労働者のイメージが深く関わっていた可能性が考えられる。しかしこのような舞台の設定は定稿には反映されなかった。定稿では、「上野の鐘」が響くくらい「上野」に隣接した空間とする以外、場所が特定できる手掛かりは見られない。

一方未定稿における良人の「ほう兵工廠の職工」という設定は、定稿に至っても「火気の満たる室」「振あぐる鎚」「職工にて工場がよひする人」と変わっていないことから、良人の仕事場を「ほう兵工廠」と特定しても不自然ではないと考

えられる。では、そのことで何が見えてくるだろうか。

砲兵工廠は、堤⁽¹⁾によれば一八七〇年旧陸海軍の兵器製造工場として東京の小石川の旧水戸藩邸跡（元後樂園遊園地）に設置されたのであり、一八七五年に武庫司と合併し砲兵工廠となった後、一八七九年に東京砲兵工廠と改称された。

砲兵工廠の例を以てせば日給賃銀は大低十時間二十五錢乃至三十錢にして、次ぎて三十五錢といへるも頗る多きが如し、中には七十錢、八十錢、助役（論者注・技術監督）なりせば一円以上に出づるものありと雖も、総じて之を言え、五十錢以上を取るは、人数に割り合せて見れば、其の数少なし、先づ普通賃銀は三十錢、三十五錢の間にありと見て可ならんか、之に分増賃銀即ち制定時間の上に労働するより得る所の賃銀あり、其の職工にして三十錢の日給者なりとせば、其の十分の一即ち一時間三錢宛を得るなり。孰れの工場に於ても概ね分増賃銀の事なきはなく、夜に入れば一時間毎に其の賃銀を通加するもあり、石川島造船所の如き、夜業は四分五厘労働せば之を五分に積り十二時迄続けば乃ち一人とし、若し一夜労働を続けて曉に至れば二人二分の賃銀を給す、規定の労働時間は十時間若くは十一時間と言ふと雖も、大抵孰れも九時頃まで夜業なきはなく、而して一ヶ月中五六回は十二時迄夜業あるを例とす。若し労働の多忙なる時に際せば一ヶ月に十日以上は十二時迄夜業す、故に三

十錢日給の者と雖も、實際一日の得る所五十錢六十錢に及ぶべし⁽¹⁴⁾

職工ノ労働時間ハ業務ニ依テ種々アリ（甲）朝七時ヨリタ五時迄ニテ休憩喫飯ノ時ヲ除キ正味九時間ト九時間半ナルトアリ（乙）朝六時ヨリタ四時半迄ニテ喫飯時間ヲ除キ正味十時間ナルアリ（工場及職工ニ関スル通弊一斑）明30・2、農商務省商工局⁽¹⁵⁾

この引用から窺えるように、良人の規定の労働時間は「十時間」でそれに対する「日給賃銀」が二十五錢と三十五錢であつたと想定できよう。なお、仕事を始める時間が朝六時から七時であつたことを、「いつも」の夕食時間として設定されている「九時」と合せて考えれば、良人はすでに少なくとも二、三時間、残業をしていたと推察できる。それに「今宵」からは、「二時づゝの仕事を延ばして」いるのであり、良人の我家を思う勤勉さはこのことだけでも十分察知できよう。

此（子）が為我が為不自由あらせじ憂き事のなかれ、少しは余裕もあれかしとて朝は人より早く起き、夜は此通り更けての霜に寒さを堪へて、袖よ今の苦勞は愁らくとも暫時の辛棒ぞしのべかし、やがて伍長の肩書も持たば、鍛工場の取締りとも言はれなば、家は今少し広く小女の走り使ひを置きて、其かよわき身に水は汲まざじ、我れを疍甲斐なしと思ふな、腕には職あり身は健かなるに、いつまで斯くてはあらぬ物をと口癖に仰せらるゝは、何

所やら我が心の顔に出で、卑しむ色の見えけるにや、恐ろしや此大恩の良人に然る心を持ちて仮にも其色の顔はれもせば。

引用の箇所から、袖の良人は自らの昇進に対する意欲を見せており、そのための具体的な将来の計画も持つていることが分かる。前述の「砲兵工廠」に関する資料の中で、「助役なりせば一円以上」の日給であつたことを参照すれば、「やがて伍長の肩書も持たば、鍛冶場の取締りとも言はれなば、家は今少し広く小女の走り使ひを置きて、其かよわき身に水は汲まざじ」という良人の言葉も信憑性がある。つまり本作品において袖の良人は、勤勉で生活上のため努力する人物として造型されていると考えられよう。その上、袖の両親にも「心からの」看病をするなど、優しさも兼備した人物であることが分かる。

父の一昨年うせたる時も、母の去年うせたる時も、心からの介抱に夜をも帯を解き給はず、咳き入るとは背を撫で、寐がへるとは抱起しつ、三月にあまる看病を人手にかけてじと思し召の嬉しさ、そのみにても我れは生涯大事にかけねばなるまじき人に不足らしき素振の有りしか、我れは知らねど左もあらば何とせん、果敢なき楼閣を空中に描く時、うるさしや我が名の呼声、袖、何せよ彼せよの言附に消されて、思ひこゝに絶ゆれば恨をあたりに寄せもやしたる

見逃してはならないのは、袖自身が良人に対して「不足らしき素振の有りしか、我れは知らねど左もあらば何とせん」という憂慮を持つていながらも、「桜町の殿」に思いを馳せらずにはいられないということであろう。

袖は良人の留守中だけではなく、彼が隣にいる時にも「桜町の殿」に思いを馳せてしまうことがあつた。特にこの引用には、良人により夢想が破れてしまうことに対して「恨をあたりに寄せもやしたる」とあり、「來し方」への夢想は袖の現在の日常生活にも影響を及ぼしていることが分かる。そしてその夢想を持続させる原動力となるのが、他ならぬ殿から絶えず送られてくる手紙である。

幾度幾度の御文を拝見だにせぬ我れいかばかり憎くしと思しめすらん、拝さば此胸寸断になりて常の決心の消えうせん覚束なさ、ゆるし給へ我れはいかばかり憎くき物に覚しめされて物知らぬ女子とさげすみ給ふも厭はじ、我れは斯る果敢なき運を持ちてこの世に生れたるなれば、殿が憎くしみに逢ふべきほどの果敢なき運を持ちてこの世に生れたるなれば、ゆるし給へ不貞の女子に計はせさせ給ふな、殿。

殿からの「幾度幾度の御文」は、「蘭燈のかげ少し暗きを捻出す手もとに見ゆるは殿の名、よし悪名なりとも此眼に感じは変るまじ」とある後の叙述から、実名で送られてきたことが分かる。これは例えば、一葉の未完の小説である『裏

紫」上(『新文壇』明29・2)で、愛人からの手紙が人目の憚られる「女文字の書状」として登場していることとは対比をなす。

かつて桜町の小間使いであった身で、それも有夫の女に対して、このような行為ができたのだろうか。殿が袖の結婚を知らなかった可能性も有り得るが、そうだとしても「奥方」のいる殿が実名を使うことは人目に晒される覚悟の上のことであつたと考えられる。

袖自身にも「拝さば」「常の決心」を守れなくなり、「不貞の女子」になつてしまふという認識があり、殿の手紙そのものに現在の結婚生活から逸脱させる可能性が潜まれていたと言えよう。問題なのは袖がそのことを知っていないながらも、殿の手紙を読まないということをお実にして捨てずに保管してきたことであり、良人との日常生活の中で殿のことを時々思つていたことであろう。その矛盾に対する覚醒が、「今宵」「今」芽生えたと考えられる。

今日まで封じを解かざりしは、我れながら心強しと誇りたる浅はかさよ。胸のなやみに射る矢のおそろしく、思へば卑怯の振舞なりし。身の行ひは清くもあれ、心の腐りのすてがたくば、同じ不貞の身なりけるを、いざさらば心試しに押し参らせん。殿も我が心を見給へ、我が良人も御覧ぜよ。

「身の行ひ」という表面的なものにだけ拘つてきたことへ

の内省は、自分の「心の腐り」に対する自覚を呼び起こしたと思われる。換言すれば手紙の封を切つても切らなくても「同じ不貞の身」であるという自覚は、手紙が未開封であることが「心強」さからではなく、実の所自分の「卑怯の振舞」に過ぎなかつたという覚醒に繋がっている。「十二通の文」の開封は、手紙を読んだ後の自分の「胸のなやみ」が恐ろしくて「今」まで避けてきた、自分自身の内面との対峙を意味すると考えられる。

三 袖の「來し方」と「今」

「十二通の文」の開封場面に先立つて描かれる、次の描写に注目しておきたい。

兒を静かに寢床にうつして女子はやをら立あがりぬ。眼ざし定まりて口元がたく結びたるまゝ、疊の破れに足も取られず、心ざすは何物ぞ葛籠の底に納めたりける一二枚の衣を打かへして浅黄ちりめんの帶揚のうちより、五通六通、數ふれば十二通の文を出して舊の座へ戻れば傍線部から窺えるように、殿からの手紙は「葛籠の底」に「一二枚の衣を打かへして」それも「浅黄ちりめんの帶揚」にと、二重三重に隠されていた。特に「浅黄ちりめんの帶揚」という設定について山田⁽⁶⁾は、「桜町の殿からの授り物の一つか」という見解を示しており、示唆に富む。

例えば『うつせみ』(『読売新聞』明28・8)では、雪子

の服装として「友仙の帯に緋ちりめんの帯あげ」(二)が描かれており、「二葉亭四迷の『浮雲』(金港堂刊、明20・6)では、「此奴も金糸で縫の入った水浅黄縮緬の半襟をかけた奴で、帯上はアレハ時色縮緬、統括めて云へばまづ上品なこしらへ」(第二篇第七回¹⁸)とお勢の服装として「時色縮緬」の「帯上」が用いられている。雪子もお勢も女学生として設定されており、特にお勢は流行に敏感な新しがり屋として設定されていることを参照すれば、「緋ちりめんの帯あげ」は袖の日常の服装¹⁹とは程遠いものであったのに違いない。「浅黄ちりめんの帯揚」に包まれた手紙という設定自体を殿と連繫するものとして読むのは不自然ではないと考える。

次に注目したいのは、破線部の叙述である。この描写は、手紙を焼却するにあたっての「目元に宿れる露もなく、思ひ切りたる決心の色もなく、微笑の面に手もふるへで」と描かれる箇所とは対照的であると考えられる。「眼ざし定まりて」しかも「口元かたく」と描かれていることから、文の封を切る事が袖の断固たる決心によるものであることが分かる。なおこの決心は「罪は我身か、殿か」「我が心は清めるか濁れるか」を明らかにするための、袖の「心試し」であった。そのため袖は「十二通の文」を開封する時を迎えたのである。

封じ目ときて取出せば一尋あまりに筆のあやもなく、有

難き事の数々、辱じけなき事の山々、思ふ、恋ふ、忘れがたし、血の涙、胸の炎、是等の文字を縦横に散らして、文字はやがて耳の脇に恐しき声もて呷くぞかし、一通は手もとふるへて巻納めぬ、二通も同じく三通四通五六通より少し顔の色かはりて見えしが、八九十通十二通、開らきては読みよみては開らく、文字は目に入らぬか、入りても得よまぬか。

そして文の封を切ることによって対面するようになった殿の思いは、文字を超え、切れぎれの声となり袖の意識を襲うことになる。重要なのはその時の袖の外面描写が、「手もとふるへ」という緊張感が窺える表現から、「少し顔の色かはりて見え」と内面の変化が窺える表現に変っている点である。なお「十二通の文」を次々と「開いて」「読む」時の描写は「文字は目に入らぬか、入りても得よまぬか」と描かれており、袖の心境変化が見受けられる。

しかし語りは、どうしてこのような変化が生じているのか、袖はいったい何を思っているのか、を明らかにしないまま展開されており、このことが原因となりこれまで様々な議論が行われてきたと思われる。この感情の変化を解明するためには第一に、袖の「桜町の殿」との関係と、「今」の良人と結婚に至るまでの経緯とを辿る必要があるだろう。

卑賤にそだちたる我身なれば始より此以上を見も知らで、世間は裏屋に限れる物と定め、我家のほかは天地のなし

と思はゞ、はかなき思ひに胸も燃えじを、暫時がほども交りし社会は夢に天上に遊べると同じく、今さらに思ひやるも程とほし、身は桜町家に一年幾度の出替り、小間使といへば人らしけれど御寵愛には犬猫も御膝をけがす物ぞかし。言はゞ我が良人をはづかしむるやうなれど、そもそも御暇を賜はりて家に帰りし時、簪と定まりしは職工にて工場がよひする人と聞きし時、勿躰なき比らべなれど我れは殿の御地位を思ひ合せて、天女が羽衣を失ひたる心地もしたりき。

まず「卑賤にそだちたる我身」とする袖の身分意識に対し、長谷川^①は「ばかばかしいほどの身分卑下」と評したが、はたしてそうだろうか。「世間は裏屋に限れる物」であると思つてきた袖にとつて、「暫時」の間ではあつたものの、上流社会での経験は、その社会からかけ離れた自分の「そだち」を認識させる動機になつたのではないだろうか。

引用から窺えるように袖は、「小間使」として桜町の家に雇われていた。清水の『女中イメージの家庭文化史』^②によれば、「上流階級では、家族の構成や人数、経済状態によつて多少の違いがあるものの、一般に「女中取締（女中頭）」「乳母」「仲働き」「小間使」「子守」など奥向きの仕事をする女中と、台所まわりの仕事をする「下女（飯炊き）」がいるのがふつう」だつた。特に「小間使」は「主に主人の身のまわりの仕事」をしており「家事や礼儀作法の習得に重

き」をおいたとする。つまり袖は、主に台所まわりの雑用に使われる『大つごもり』、『文学界』明27・12）のお峯とは違ふ境遇に置かれていたと考えられる。即ち袖が他ならぬ「小間使」であつたため、主人の「御寵愛」を受けるといふ設定が可能であつたと言えよう。

なお「世間は裏屋に限れる物と定め、我家のほかに天地のなしと思はゞ、はかなき思ひに胸も燃えじを」とあるように袖は「裏屋」育ちであつたことが見て取れる。「裏屋」とは「裏長屋」のことで江戸時代では庶民の一般的な住居^③であつたが、明治時期では「もつとも貧しい住まい」^④と見なされた。

一葉の他の作品の中でも「裏屋」はしばしば用いられており例えば、『大つごもり』では「同じ町ながら裏屋住居に成しよしは聞けど」「月五十錢」^⑤の裏屋に人目の恥を厭ふべき身ならず（上）と貧しい伯父の住む所として「裏屋」が設定されている。また『わかれ道』、『国民之友』明28・12）で、妾になることを決心するお京という女が暮らしていたのも「裏長屋」であつた。お京は「何時かお前が言つた通り上等の運が馬車に乗つて迎ひに來たといふ騒ぎだから彼処の裏には居られない」「最うお妾でも何でも宜い、何うで此様な詰らないづくめだから、寧ろその腐れ縮緬着物で世を過ぐさうと思ふのさ」（下）と「裏屋」での暮らしから逃れられることを「上等の運が馬車に乗つて迎ひに來た」と語る。

「最うお妾でも何でも宜い」というお京の発言は、それが人道にもとつた行為だとしても「縮緬着物」を着る身分になりたいという欲望を垣間見させる箇所であると思われる。

ここで特に注目したいのは、『たけくらべ』（『文学界』明28・1）、八を発表したのは、明28・3）での「此あたりの裏屋より赫奕姫の生るゝ事その例多し」（八）という箇所である。

『軒もる月』の成立時期を『たけくらべ』（八）の脱稿後の、三月二十二日頃から十日ほどの間とみる見解^②が定説となつてゐることを想起すれば、『たけくらべ』での、「裏屋」から出た「赫奕姫」というイメージが袖という人物造形に関わつてゐる可能性は十分考えられる。

よしや此縁を厭ひたりとも野末の草花は書院の花瓶にさゝれん物か、恩愛ふかき親に苦を増させて我れは同じき地上に彷徨ん身の取あやまちでも天上は叶ひがたし、若し叶ひたりとも夫は邪道にて正当の人の目よりはいかに汚らはしく浅ましき身とおとされぬべき、我れはさても殿をば浮世に誹らせ参らせん事くち惜し、御覽ぜよ奥方の御目には我れを憎しみ殿をば嘲りの色の浮かび給ひしを。

しかし袖には、「赫奕姫」になる道は与えられなかった。「地上」の「野末の草花」が「天上」の「書院の花瓶」に挿されるためには「邪道」の道を辿るしかない。袖にとつてそ

の「邪道」の道は「恩愛ふかき親」の存在と袖自身の世間の人の評判への憂慮によつて遮られていたのである。袖は「取あやまちでも天上は叶ひがたし」という判断の下、自ら「今」の良人との結婚を決めた。

が、結婚と同時に終止符を打たなければならなかった殿との関係は、絶えず送られてくる殿の手紙によつて「今」も続いている。「不貞の女子に計はせさせ給ふな、殿」という袖の内言からも窺えるように、袖にとつて殿から送られるメッセージは、手紙を開封しなくても届くものであつたと考えられる。そのような手紙を未開封のまま保管することとはどのように捉えられるだろうか。

例えば『暁月夜』（『都の花』明26・2・19）では、手紙に返答しないことを恨む男の前で、「お志しの文封は切らねど御覽ぜよ此通りと、手文庫に誠を見せしが」（第六回）と未開封の手紙の束を見せつける場面がある。未開封であつても手紙を保管していること自体に、女主人公の秘められた思いが託されてゐると考えられる。

一方『軒もる月』で焦点となるのは、手紙の発信者である殿（「來し方」の恋人）と良人（「今」の夫）との間で煩惱する女の姿である。

父の「昨年うせたる時も、母の去年うせたる時も、心からの介抱に夜るも帯を解き給はず、咳き入るとては背を撫で、寐がへるとては抱起しつ、三月にあまる看病を人

手にかけてと思し召の嬉しさ、夫れのみにて我れは生涯大事にかけねばなるまじき人に、不足らしき素振の有りしか、我れは知らねど左もあらば何とせん、果敢なき楼閣を空中に描く時、うるさしや我が名の呼聲、袖、何せよ彼せよの言付に消されて、思ひこゝに絶ゆれば恨をあたりに寄せもやしたる、勿体なき罪は我が心よりなれど桜町の殿といふ面かげなくば胸の鏡に映るものもあらじ、罪は我身か、殿か、殿だになくは我が心は静なるべきか、否、かゝる事は思ふまじ、呪詛の詞となりて忌むべき物を。

自分の親のため、苦勞を厭わなかつた良人に対する「夫れのみにて我れは生涯大事にかけねばなるまじき人」という思ひは、「今」の結婚生活を持続させる一番の要因であると考えられる。その一方で「來し方」の「暫時がほども交りし」「楼閣」への夢想は、殿への末練を捨て切らずにいる袖の「今」を物語るのであらう。そしてそのことが、「恨をあたりに寄せもやしたる」とあることから、袖の現在の日常生活にも影響を及ぼしていることが窺える。

「今宵」袖に課せられたのは、殿からの「十二通の文」とともに封印していた「我が心」を見極めることであつた。そしてそれは、他ならぬ「今」の現実と向き合うことであつたと考えられる。

四 激情との対峙

「我が心は清めるか濁れるか」と挑んだ「心試し」(十二通の文)の開封)は、袖の予想をはるかに超え、激烈な自己内面の戦いをもたらす。

いざ雪ふらば降れ風ふかば吹け、我が方寸の海に波さわぎて沖の釣舟おもひも乱れんか、風ぎたる空に鷗なく春日のどかに成なん胸か、桜町が殿の容貌も今は飽くまで胸にうかべん、我が良人が所為のをさなきも強いて隠くさじ、百八煩惱おのづから消えばこそ、殊更に何かは消さん、血も沸かば沸け炎も燃へばもとて、微笑を含みて読みもてゆく、心は大滝にあたりて濁世の垢を流さんとせし、某の上人がためしにも同じく、恋人が涙の文字は幾筋の滝のほとばしりにも似て、氣や失なはん心弱き女子ならば。

引用から窺えるように「雪ふらば降れ風ふかば吹け」「血も沸かば沸け炎も燃へばもとて」と袖は、心の内側に湧き上がってくる情念と向き合っており、その情念は「大滝」の「幾筋の滝のほとばしり」に喩えられるほど激しいものであることが見受けられる。

特にここで用いられている「某の上人がためしにも同じく」という修飾は、山田の指摘³⁵⁾のように『平家物語』巻五「文覚荒行」³⁶⁾を踏まえた表現であると思われる。「文覚

荒行」とは、文覚上人が荒修行の末大願を果たすという話である。文覚は滝壺で一度意識を失うが、不動明王に助けられ再生し「すさまじいエナジ―の持ち主」⁽²⁾に生まれ変わる。このような文覚の修業が、袖の姿に喩えられていることは、袖の〈高笑い〉を巡る解釈への一つの観点を示唆していると思われる。

まず考えられるのは、自分の内面の激烈な戦いに立ち向かっている袖の姿に、命をかけて滝に打たれ続ける文覚上人の姿が重ねられていることである。なおその時の描写が「微笑を含みて」「氣や失なはん心弱き女子ならば」とあることから、精神的な危機を乗り越えた袖の強靱な姿が見受けられる。次に考えられるのは「文覚荒行」で扱われている、苦行を通して穢れを浄化するといった修験道的な「擬死再生儀礼」というイメージである。「擬死再生儀礼」とは「罪深い過去の自分を滅して新しく浄土に再生」⁽²⁸⁾、つまり死を覚悟した苦行によって穢れを清めるといった意識である。

つまり文覚上人が「濁世の垢を流さんとせし」苦行に挑んだように、袖は「我が心」を見極めるため「恋人が涙の文字」に目を背けず向き合っていると見えよう。ここで描かれる「桜町が殿の容貌」「我が良人が所為のをさなき」とは普段の袖にとつては禁忌の対象であつたに違いない。それを自ら噴出させることで、袖は「來し方」から「今」までの自分を直視することができたと考えられる。そのことが明示され

るのが次の段落であろう。

傍には可愛き児の膝姿みゆ、膝の上には無情の君よ我れを打捨て給ふかと、殿の御声ありあり聞えて、外面には良人や戻らん更けたる月に霜さむじ、たとへば我が良人今此処に戻らせ給ふとも、我れは恥かしさに面あかみて此膝なる文を取かくすべきか、恥づるは心の疚ましければなり、何かは隠くさん。殿、今もし此処におはしまして、例の辱けなき御詞の数々、さては恨みに憎くみのそひて御声あらく、さては勿体なき御命いまを限りとの給ふとも、我れは此眼の動かん物か、此胸の騒がんものか、動くは逢見たき欲よりなり、騒ぐは下に恋しければなり。内面の渦巻く感情との遭遇といった修行を終えた袖は、依然として自分を取り囲んでいる「我子」「殿」「我良人」という存在と対面する。点線部から窺えるように「傍」「膝の上」「外面」といった袖の身体を巡った物理的な空間は、「可愛き」我子、まだ帰ってきていない良人、そして恋心を刺激する殿といった精神的な存在によって示されている。見過ごしてはならないのは、これらの人物に対する描写が手紙を読む以前と変わらない反面、袖の心情が窺える描写には変化が生じていることである。その変化とは、良人の前で手紙を隠さない、また殿が「御命いまを限りとの給ふとも」その誘惑に応じないという意志表明であろう。

袖は長い間、良人に対して手紙を隠し続けてきたのであり、

良人に自分の気持ちがあけられることを「恐ろしや此大恩の良人に然る心を持ちて假にも其色の頭はれもせば」と懸念していた。しかし手紙を読み終えた現在、袖は「何かは隠くさん」と言っているのである。

現実を考えた時、たとえ袖に「心の疚ま」しさが無くなつたとしても、手紙のことは良人には受け入れ難い事態であろう。例えば『われから』のように夫から「不埒者」と切り捨てられてもやむを得ない状況に違いない。それにも拘わらず、袖は「何かは隠くさん」と言っておりこの言葉は、ある覚悟を決めた表現であると考えられる。

なお殿の切なる思いに対しても「我れは此眼の動かん物か、此胸の騒がんものか」としており、かつての袖には見当たらなかった強靱な意志が見受けられる。文覚上人が苦行の末、「浄土」に至つたのなら袖は良人・殿との間での煩惱から逃れることができたと見えよう。

来し方往く末おもひ忘れて夢路をたどるやう成しが、何物ぞ俄にその空虚なる胸にひびきたると覺しく、女子はあたりを見廻して高く笑ひぬ、其身の影を顧り見て高く笑ひぬ、殿、我良人、我子、これや何者として高く笑ひぬ、目の前に散乱れたる文をあげて、やよ殿、今ぞ別れまいらするなりとて、目元に宿れる露もなく、思ひ切りたる決心の色もなく、微笑の面に手もふるへで、一通二通八九通、残りなく寸断に為し終りて、熾んにもえ立つ炭火

の中へ打込みつ打込みつ、からは灰にあとも止めず煙りは空に棚引き消ゆるを、うれしや我執着も残らざりけるよと打眺むれば、月やもりくる軒ばに風のおと清し。

引用から窺えるように「来し方往く末」を忘れさせるほど激烈であつた自分の内面との対峙は、袖にとつてこれまで封印して向き合なかつた自分の「胸の悩み」を見極める時間であつたと思われる。そして激しかったその時間を経由した袖が下した決断とは、他ならぬ手紙の焼却であつた。

重要なのは、手紙の焼却の直前に三度も続く「高笑い」をどのように捉えられるかであろう。前後の文脈上、袖の身の「あたり」とは袖自身が置かれている「今」の物理的な状況を指していると考えられる。薄暗い蘭燈の火かげに照射される「破れ窓の障子」「畳の破れ」「すゝけたる天井」といった家の状況は、周りに散乱れている「十二通の文」とともに「今」までの袖の境遇を物語るものであつたに違いない。

そしてそこに映しだされる「身の影」とは袖自身の姿であろう。これは「来し方」から「今宵」までの自分自身に対する自覚であつたと思われる。

なお「殿、我良人、我子、これや何者」は袖自身を取り巻く他人の存在に対する「止揚」であると考えられる。彼らは袖にとつて愛人、妻、母としての役割を与えた存在であり、袖の「来し方」から「今」までの人生を決定づけた存在であつた。つまり「高笑い」の対象は、現在の袖を取り囲む現実

そのものであったと考えられる。

即ち〈高笑い〉の後に続く手紙の焼却は、単に殿に対する決別の宣言だけではなく、「良人」「我子」という「今」までの生き方を決定づけた存在と自分の現在の状況への止揚までも内包していると考えられる。

本作の結末において、「空」に消えてゆく手紙の残煙は、長い間袖の内面に蹲っていた願望との決別を象徴していると考ええる。同時にそれは、今までの「來し方」との決別でもあったと考えられる。袖の「執着」の対象は、殿だけではなく「我良人」「我子」でもあったのであり、自分の心に背を向けたまま三者の間で生きようとした「我が心」でもあったのである。

「今宵」袖は「來し方」とは違う「往く末」へ向けて、手紙の焼却といった決断を下した。その決断は、殿との別れの宣言であると同時に殿と良人の間で煩惱してきた「我執着」との決別でもあったと考えられる。そしてそれが「目元に宿れる露もなく、思ひ切りたる決心の色もなく、微笑の面に手もふるへで」行われていて、そこには一瞬の躊躇いも見当たらない。それは「我が心」が見据えられた後到達することができた袖の一種の「悟り」であり、他者に惑わされまいと思う強靱さの表れであると考えられる。

結語

本作品は、袖という女主人公の次々と続く想念を通じて、深くその心理の奥底に肉迫した作品と言えよう。袖の「今」までの「はかなき思ひ」は、未整理のままに封印していた「來し方」に起因するものであり、その「來し方」を清算する場として「十二通の文」の封を切る場面が用意されていると考える。そしてその結果は、袖の予想を遥かに超えた激的な葛藤であった。

内面の渦巻く感情に遭遇し、抑圧した思いを噴出させた袖は、依然として自分を取り囲んでいる「我子」「殿」「我良人」という存在と対面し、決断の時を迎える。袖が下した決断とは他ならぬ「來し方」から「今」まで袖を煩惱させてきた手紙の消却であった。そしてそれは「殿、我良人、我子」という関係の中で、自分の内面の願望に目を背けてきたことへの「悟り」でもあったと考えられる。

重要なのはその「悟り」が、殿か良人かという二者択一の次元を超えていることであろう。殿の如何なる行動にも良人の前でも自分の意志を貫くという覚悟は、「今」までの袖には見当たらなかったものに違いない。作品はここで閉じられているわけであるが、その行き先は良人との破綻あるいは良人と子供を持つ女の「出奔」といった逸脱と背中合わせのものであると思われる。

注

- (1) 戸松泉『軒もる月』の生成——小説家一葉の誕生——(『相模女子大学紀要』第五六号、平5・3、四三頁)
- (2) 笹川洋子『軒もる月』をめぐる言語行為——心の「影」の世界への眼差し(『親和国文』平20・12、十八頁)
- (3) 関礼子『読む』ことによる覚醒——『軒もる月』の物語世界——(『亜細亜大学教養部紀要』第四三号、平2・11、一一三—一四頁)
- (4) 関礼子、前掲載、一一四頁。
- (5) 笹淵友一『『文学界』とその時代 下(明治書院、昭36、一二三六頁)
- (6) 例えば山田有策の「虚無的」(『鑑賞』『全集樋口一葉』第二卷、小学館、昭54・10)という指摘と、戸松泉(注1)の「〈現実〉を突き抜けたところからの一種虚無的な匂いのする笑い」とする指摘がある。
- (7) 関礼子(注3)の「殿への愛想尽かしの笑い」で「桜町への別れのメッセージ」とする指摘と、滝藤満義の「これまで自分を迷わせ続けてきた三者の絆しを、ついに解脱する境地に達したのであり、笑いは豁然大悟のしるし」(『軒もる月』——悟道を急ぐ女(『国文学解釈と鑑賞』平15・5)とする指摘が挙げられる。
- (8) 笹川洋子、前掲載。
- (9) 『江戸の時刻と時の鐘』(岩田書院、平14・2、二二頁)
- (10) この統計は、各府県統計書と各企業のデータから推計したものを基に、所帯数は内閣統計局『日本帝国統計摘要』によつたとある。内田星美「明治時代における時計の普及」(『遅刻の誕生 近代日本における時間意識の形成』三元社、平13・8)
- (11) 『軒もる月』未定稿B・II(『樋口一葉全集 第一巻』筑摩書房、昭49・3、四八五頁)
- (12) 江波戸昭『東京の地域研究』(大明堂、昭62・3、六十一頁)
- (13) 堤一郎「平岡工場と東京砲兵工廠」『公開研究会・講演会技術と社会の関連を巡って…技術史から経営戦略まで…講演論文集』(平14・10、五一頁)
- (14) 横山源之助『日本之下層社会』(岩波書店、昭24・5、二五—二五三頁)
- (15) 隅谷三喜男編『職工および鉦夫調査』(光生館、昭45・2、五五頁)
- (16) 山田有策「軒もる月」脚注、六六頁、前掲載。
- (17) 青木稔弥・十川信介校注『新日本古典文学大系明治編18 坪内逍遙二葉亭四迷集』岩波書店、平14・10、二九四頁)
- (18) 袖の服装の描写として作中では「旧りたる衣に軟へたる帯」という描写が見られる。
- (19) 『評釈一葉小説全集』(富山房百科文庫、昭13・8)

(20) 清水美知子『(女中) イメージの家庭文化史』(世界思想社、平16・6・15)

(21) 玉井哲雄「江戸裏長屋について」(『建築雑誌』第九一号、昭51・12)一二三頁を踏まえた。

(22) 菅聡子「軒もる月」補注、『新日本古典文学大系 明治編二 樋口一葉集』(岩波書店、平13・10)、一八六頁。なお同書の「大つごもり」の補注(一〇七頁)には、『東京風俗志』からの次の引用が見られる。「貧民が住む裏長屋は、いづれも平屋作の一棟長屋を数軒に割り、僅かに四畳半乃至六畳程の一室あるのみにて、これに一畳程の土間ありて、半は沓脱とし、半は板張にして形ばかりの流しに充つ」再引用。

(23) 明治二十年代の実態生計費の調査で、人力車夫の家族四人の一日生活費が二十五銭、三十年代で四十五・九銭だったという統計を参照すれば、月五十銭という賃金は至って安かったと推測できる。津田真澄「明治初期——三〇年代の「貧民窟」の職業および生活水準」(『日本の都市下層社会』ミネルヴァ書房、

昭47・10)を踏まえた。

(24) 前掲載、菅聡子の「軒もる月」補注、一八四頁、なお関礼子も「作品編 軒もる月」(『樋口一葉事典』おうふう、平8・11)で同じ見解を示す。

(25) 山田有策「軒もる月」脚注、六七頁、前掲載。

(26) 論者は梶原正昭他校注『新日本古典文学大系四四 平家物語上』(岩波書店、平3・6)の二八八―二九一頁を参照した。

(27) 坂口守男「熊野説話とその精神病理」(『大阪教育大学紀要』第四部門教育科学、第五八巻第二号、平22・2)六七頁を踏まえた。

(28) 坂口守男「熊野説話とその精神病理」(前掲載)を踏まえた。

※本文の引用は、『樋口一葉全集 第一巻』(昭49・3、筑摩書房)による。

(キム・ユニ／本学大学院博士後期課程)